

六〇年代児童文学が書いたこと

藤田 のぼる

1

ここまで、連載の第一回は、序論として「現代児童文学史」が求められる時代的、状況的モチーフについて述べ、前回、第二回は、一九六〇年前後の現代児童文学の発達の背景やその意味について考察した。

この連載は全六回で、今回対象とする六〇年代に続けて、次回の第四回は「七〇年代児童文学の諸相」、第五回は「児童文学の八〇年代」、そして第六回が「児童文学」の終わりと始まり」という予定（次回以降のタイトルはいずれも仮）である。つまり、今回を含めた三回は、十年ごとの展開を四百字十八枚ずつにまとめることになるわけで、かなり強引な見取り図を示しながら語っていくことになる。

「六〇年代」「七〇年代」といった人為的な時間の区切りが、果たして児童文学の実態の変化にうまく対応するもの

なのかどうかという問題はもちろんあるわけだが、こちらの発想の故にそういうふうに見えてしまうということは多分にあるとしても、ちょうど一九六〇年前後に現代児童文学がスタートしたということもあって、十年刻みの捉え方は、日本の児童文学状況の変化を語っていくのに存外便利ということはいえる。

さて、六〇年代の児童文学をあえて図式的にしてみれば、前回述べた現代児童文学の発足を担った書き手たち（便宜的に彼らのことを「出発世代」と呼ぼう）のその後の展開という部分と、その出発に乗り遅れた書き手たちの言わば「後発の出發」という要素、という二つの側面がまずあり、これに新しい世代の書き手が絡んでくるというのが、きわめて大雑把な見取り図ということになるだろうか。

さて、「後発の出發」ということだが、ここにも二つの集団というか背景があって、まずは出発世代の一つ上の世代の書き手たちがおり、そして出発世代と世代的には重なる